京都府立医科大学附属病院広報誌

かもがわ

vol. 44
2025.8

手の中に浮かんでいるフレフレちゃん※。移行期医療支援センターのたすきを掛け、小児科から成人診療科への移行を考えている患者さんとご家族を応援しています。

※フレフレちゃん…小児医療センターのマスコットキャラクター

CONTENTS

▶ 02　特集
京都府移行期医療支援センター設置！

▶ 06　健康・医療の豆知識

▶ 08　病院で働く人々
医療従事者（看護部）のユニフォーム紹介

理　念

世界トップレベルの医療を地域へ

基本方針

高度で安全、患者さんにとって安心な医療の提供に努めます
患者さんの権利を尊重し、患者さん主体の医療を行います
すべてのスタッフは互いに連携し、チーム医療を進めます
新しい医療を開発するとともに、未来を担う医療人を育成します
京都府における基幹病院として、地域医療に貢献します

特集

京都府移行期医療支援センター　設置！

移行期医療ってなぁに？

当院の小児相談窓口
075-251-5605（直通）　相談時間：月～金　9時～12時、13時～15時

慢性疾患をもつこどもは、成人になっても診療や療養が必要になることがあります。「移行」とは、小児を中心とした医療から、成人を対象とする医療に切り替えていくプロセスで、そのプロセスがスムーズになるように懸け橋となる医療が移行期医療です。移行期医療は、単に転科することをさすのではなく、患者さんにとって良質な医療や療養環境が切れ目なく提供され、患者さんが安心して療養できるように、小児期・成人期にわたり関連する診療科医師に加えて医療従事者、行政、福祉関係など様々な領域・職種が連携しながら最適な体制を整備することが必要となります。また、成長発達過程にある患者さんの自立/自律に向けた支援を段階的に進めることが大切です。

患者さん主体の目標

必要なケアが中断されることなく
自分に見合ったヘルスリテラシー※を獲得し、安心して成人移行できる

1. 成人になっても良質の医療が継続される
2. 医療だけでなく、心理・社会的な問題や教育、就労支援など多面的な視点で支援をうけられる
3. 主体となって自己管理できるようになる

様々な領域・職種による患者さんに応じた段階的な移行支援
※情報を理解・活用できる力

おしえて！京都府移行期医療支援センターのしくみ

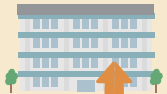
こどもからおとなへ　診療の橋渡しのお手伝いを

京都府からの委託事業として、院内に小児期発症慢性疾患患者の円滑な成人診療科への移行と自立を支援する「京都府移行期医療支援センター」が設置されました。

当院では、これまでから院内の移行期医療支援センターにおいて、他の診療科や医療機関とのカンファレンスを実施するなど院内患者さんを対象に成人診療科への移行支援を行ってまいりました。

このような院内での支援活動に加え、今後は京都府のセンターとして、小児期に慢性疾患に罹患し、治療を開始した患者さんが成人期を迎えるにあたり、年齢に応じた適切な医療が切れ目なく提供されるよう、小児期発症慢性疾患患者に対応可能な医療機関に関する情報の共有など、府内全域の医療機関を対象に、患者さんを適切に成人診療科につなげるための仕組みづくりや環境整備を進めてまいります。

京都府 健康福祉部
小児期発症慢性疾患・
移行期医療体制強化事業



情報共有・連携

委託

京都府公立大学法人
京都府立医科大学附属病院　移行期医療支援センター
設置
詳しくは 京都府立医大病院　移行期医療支援センター

京都府移行期医療支援センター

移行期医療支援コーディネーターを中心とした支援体制

- 小児科と成人診療科の医師等が集まる専門家会議の開催を通して、連携体制を構築
- 移行期患者の受入が可能な成人期医療機関の把握
- 成人期に達した小児期発症慢性疾患患者に対応可能な病院や医療機関に関する情報を関係機関と共有
- 移行期医療に関する周知・啓発
- 連携の難しい分野の現状の把握、その改善策
- 患者の自立支援に対する情報と支援
- 社会福祉的支援・就労支援

地域医療機関

- 大学病院との連携による地域での移行期医療
- オンライン多職種カンファレンスによる連携
- 社会福祉的支援の情報共有

自立支援に向けた取り組み

- 地域市役所、保健所、福祉事務所との連携による社会での自立支援
- 学校教育機関との連携
- 患者会との連携、紹介

センター長、副センター長のあいさつ

移行期医療支援センター　センター長

小児科　教授　**家原（いえはら）　知子（ともこ）**

当院から府内全域へ移行期医療の推進

このたび、本院の移行期医療支援センター（令和５年設置）が、京都府移行期医療支援センターとして指定開設されることとなりました。本センターは、小児慢性特定疾病を有する患者さんが成人期に円滑に医療移行できる体制を構築し、切れ目のない医療を提供することを目的に設置されました。現在、府内では多くの患者さんが成人期に達しながらも、疾患の年齢変化や心身の成熟に即した適切な診療体制の確保が困難な状況が続いております。本センターでは、小児診療科と成人期診療科の密な連携を図り、医療従事者や関係機関と協力しながら、患者さんとそのご家族の自立（自律）を支援いたします。今後は、移行期医療に関する成功事例の共有や研修等を通じて周知･啓発をすすめ、府内全域の移行期医療の推進に努めてまいります。皆様のご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

移行期医療支援センター　副センター長

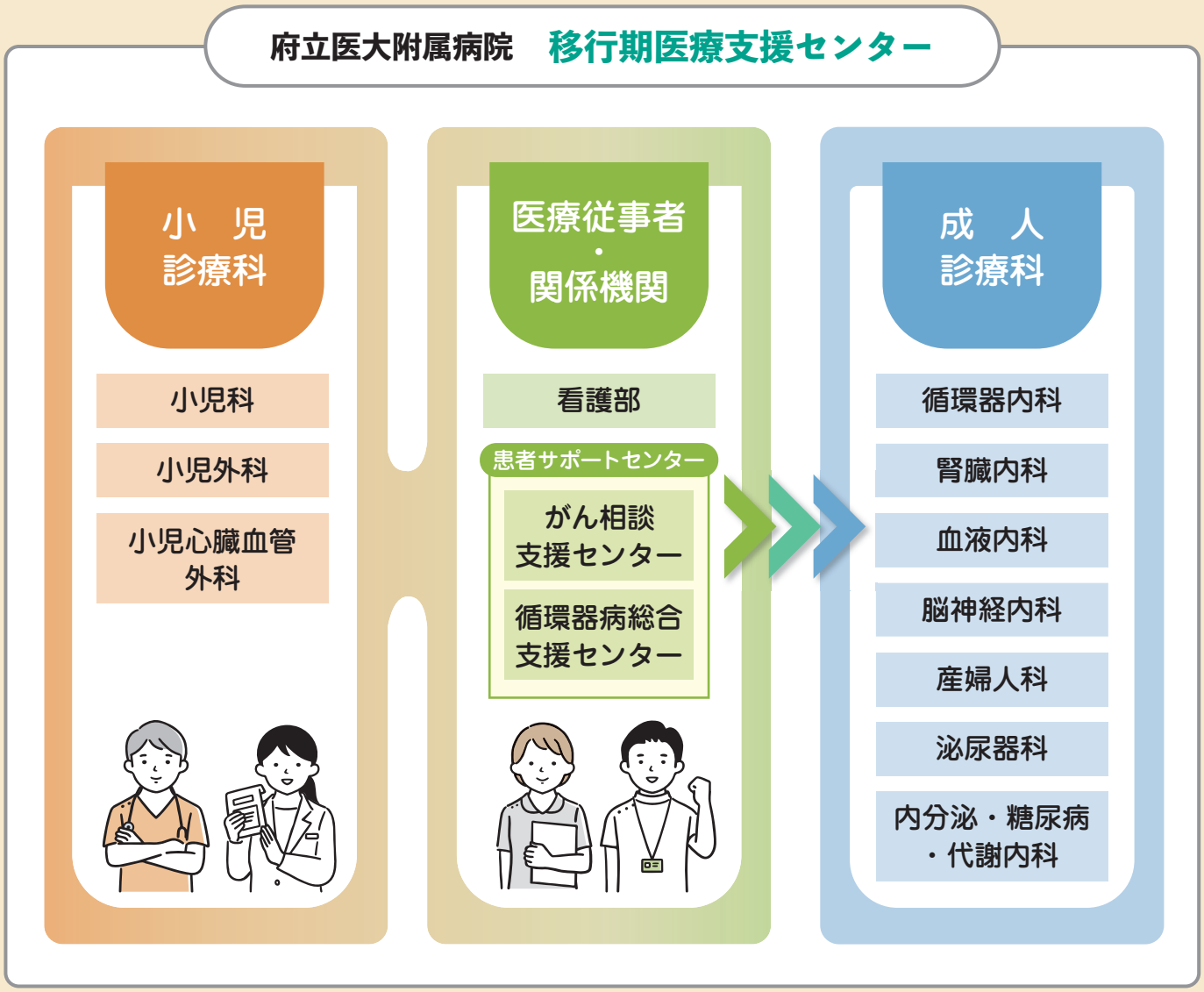
循環器内科　教授　**的場（まとば）　聖明（さとあき）**

相談しやすい体制を構築

近年の外科手術の進歩により、先天性心疾患をお持ちの子どもさんの多くが、無事手術を終えられ、今では 90％以上の方が成人期を迎えられています。ただ、子どもの頃に手術を受けて無事に過ごされておられても、大人になってから再び合併症を起こす可能性があるため、定期的な経過観察が必要です。しかし実際には、進学や就職に伴う転居を機に、診療が中断されるケースが少なくありません。このため、子どもから大人へと切れ目なく医療をつなぐ「移行期医療」の整備が重要となってきました。本院でもこれまでに多職種による総合的医療体制を整え、既に 120 回近くの定期カンファレンスを開催し、成人先天性心疾患の診療方針を検討してきました。この度、京都府の移行期医療センターが大学病院内に設置され、より身近に相談に来ていただきやすい体制が整いました。是非ともお困りの事などをお気軽にご相談いただければ幸いです。

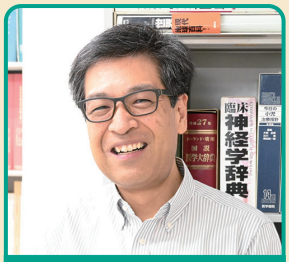
クローズアップ！
移行期医療支援センターの関連診療科・センター

京都府移行期医療支援センターは、小児および成人を担当する多くの診療科の医師、看護師、臨床心理士、ソーシャルワーカーといった多くの職種で構成されています。小児期に発症して、成人になってからも医療が必要な患者さんに対して、治療を担当する診療科や医療機関をどのように移行させていくかを考えるだけでなく、看護師や臨床心理士による患者さんの自立支援、ソーシャルワーカーによる医療費助成や就労の相談など、多方面からの支援を行います。また、京都府において移行期医療が可能な医療機関に関する情報提供、地域の医療機関との連携、移行期医療に関する教育や啓発を行うことによって、京都府における移行期医療支援の要としての役割を果たしていきます。



活躍する専門家

血液腫瘍性疾患※に向き合う



小児科
准教授　大曽根（おおそね）　眞也（しんや）

京都府立医科大学附属病院は、厚生労働省が指定する小児がん拠点病院であり、小児がんや血液疾患の患者さんを数多く診療してきました。治療の進歩によってこれらの疾患の多くは治癒するようになり、社会人として活躍される方々が増えています。しかしその一方で、治療の合併症等によって長期間にわたって苦労され、成人になってからも医療が必要な方々が少なからずいらっしゃいます。成人期にどのような医療が必要かは患者さんによって大きく異なりますし、どの診療科や医療機関を受診するかを考える際には、就職や結婚といったライフイベントも考慮することが重要です。京都府移行期医療支援センターでは、一人一人の患者さんを全人的にとらえ、最適な医療を患者さんとともに考え、患者さんのよりよい人生を支援いたします。

※白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫などの「血液のがん」

成人先天性心疾患　診療科の垣根を越えて

循環器内科
助教（学内講師）
中西（なかにし）　直彦（なおひこ）

新生児の約 1% が先天性心疾患をもって生まれてきますが、医学の進歩により、現在ではその 90% 以上が成人期を迎えられるようになってきました。これらの方々は「成人先天性心疾患」と呼ばれ、患者数は年々増加しています。その中には単純な心奇形だけでなく、複雑な心奇形を有する患者さんも増えており、成人先天性心疾患患者さんをどのようにフォローしていくかが大きな課題となっています。多くの患者さんは幼少期に手術を受けていますが、術後長い年月を経てから新たな問題が生じることも多く、大人になってからも長期的なフォローが必要です。しかし、無症状の場合などでは通院が中断されてしまうこともあり、小児期から成人期への切れ目のない移行期医療が極めて重要となります。当院では移行期医療支援センターを設立し、小児科・心臓血管外科・循環器内科が一体となって、成人先天性心疾患患者さんの診療に取り組んでおります。

こどもの成長発達に合わせたサポート

看護部
小児看護専門看護師
竹之内（たけのうち）　直子（なおこ）

成人になっても医療を必要とするこどもが、いずれ訪れる将来の成人医療をスムーズに受けながらより生活の質を維持・向上できるように、個々の成長に合わせて支援を行うことが大切です。そのために、自分の病気や治療を理解して自己管理を行ったり、困った時に周囲にサポートを求めたりするなどの療養行動がとれるように、こどもの理解や能力に合わせて情報提供やセルフケアの促進が必要になります。自立支援では、こどもがヘルスリテラシー（健康情報を入手し、理解、評価し、活用するための知識・意欲・能力）を獲得できるよう、段階的にこどもが自信をつけ、自己管理が行えるように、一緒に目標を考えたり、うまくいく方法を相談したりしながらサポートします。

また、こどもの病状や状態によっては、家族だけでなく行政や福祉など地域のサービスも利用しながら、患者さんにとってよい生活の質が保障されるような体制整備を進めることも大切です。

臨床工学部　連載企画
vol. 8

医療機器の豆知識

「地域でも安心できる呼吸管理を」

在宅人工呼吸器は、病気や障害により自力で十分に呼吸することが難しい方が自宅で使用できる医療機器です。人工呼吸器は、電動で空気や酸素を肺に送り込み、呼吸を助ける役割を果たします。かつては病院での使用が一般的でしたが、医療技術の進歩により、現在では在宅でも安全かつ安定して使用できるようになりました。機器はコンパクトで、ベッドのそばや車椅子に取り付けることもでき、電源やバッテリーを使って作動します。在宅での使用にあたっては、様々な職種や機関が連携し、定期的な点検やサポートを通じて安全な管理が行われています。在宅人工呼吸器を使用していても、学校や職場に通ったり旅行に出かけたりと、自分らしい生活を送っている方が多くいらっしゃいます。

画像提供
／フクダライフテック京滋株式会社
／チェスト株式会社
／株式会社 Kist

臨床検査部　連載企画
vol. 35

臨床検査の豆知識

「長い目でみる先天性心疾患」

心臓は酸素を豊富に含んだ血液を全身へ送り、二酸化炭素を多く含んだ血液を肺に送り出すポンプのような役割をしています。

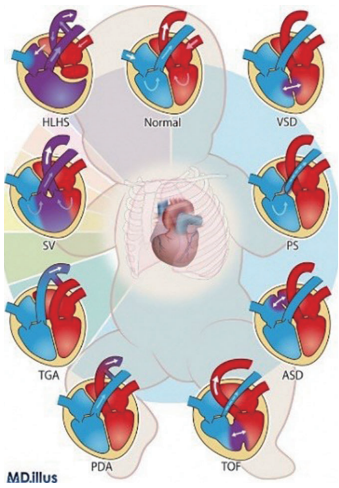
先天性心疾患は、生まれつき心臓の壁に穴があいていたり、心臓や血管のつながりに異常があることで、血液の正常な流れが保てなくなり、様々な症状が出る病気です。

症状の現れかたは人それぞれで、生まれてすぐに手術が必要になる場合もあれば、大人になってから初めて気づくこともあります。

心臓の状態を調べるためには「心臓超音波検査」という体に負担のない安全な検査を行います。赤ちゃんから大人まで、年齢を問わず検査を受けることができ、心臓の形や動き、血液の流れなどを確認できます。

また、先天性心疾患のある方は、年齢を重ねるなかで心不全や肝障害、血栓症などの合併症が出てくることもあります。

心臓の検査と合わせて腹部超音波検査も行い定期的に経過を見ていきます。



栄養管理部　連載企画
vol. 27

栄養の豆知識

「朝ごはんを食べて健康的な体づくりを！」

みなさんは朝ごはんを大切にしていますか？

朝ごはんには、脳や身体を目覚めさせる効果があり、朝から活動する準備を整えるために欠かせません。特に成長期のこどもにとって、朝ごはんは一日に必要なエネルギーを確保するためにとても重要です。こどもの頃の食習慣は、今後のライフスタイルの基礎となります。パンやごはん、肉や魚、野菜などをバランスよく組み合わせた朝ごはんを心がけましょう。

今回は忙しい朝でも手軽に準備できるレシピを紹介します！

レンジで簡単！グラタン風キッシュ

＜材料＞（1人分）
- ★食パン5枚切り　1枚
- ★冷凍ブロッコリー　30g
- ★しめじ　30g
- ★ツナ缶30g（ハムやウインナーに変えてもOK）
- ★ミニトマト　2個
- ★卵　1個
- ★牛乳　50cc
- ★塩コショウ　少々
- ★ピザ用チーズ　20g

＜作り方＞

①食パンをトースターで焼き、一口サイズにちぎる。（時間がないときは焼かなくても◎）しめじは石づきを取っておく。

②器に卵を割り、牛乳、塩コショウを加えてよく混ぜた後、同じ器に具材を全て入れる。

③チーズをかけて、電子レンジ（600W）で約3分加熱する。卵が固まったら完成！

※卵が固まっていなければ追加で加熱してください。

＜栄養量＞　エネルギー　462kcal　タンパク質　25.9g　脂質　16.3g　炭水化物　50.2g　食塩相当量　1.9g

薬剤部　連載企画
vol. 39

くすりの豆知識

「くすりの用量はどのように決まるの？」

薬の効果を引き出し、副作用をできるだけ抑えるためには、個々の患者さんに合った「ちょうどよい量」で服用することが大切です。

薬が開発される際には、体の中で薬がどのように働くかを調べ、使い方や用量が決められます。飲み薬の多くは、小腸で吸収されて血液に入り、全身をめぐって目的の臓器に届き、効果を発揮します。その後、主に肝臓で代謝され、腎臓を経て尿とともに体の外へ排泄されます。

しかし、加齢や病気によって肝臓や腎臓の働きが低下すると、薬が体にたまりやすくなり、副作用が起こるリスクが高まります。そのため、薬の投与量や服用回数を減らすなどして、体の状態にあった量に調整することがあります。こどもの場合も同様に、成長段階や体の状態に見合ったきめ細やかな調整が必要になります。

薬の量は、病気の種類や重さ、年齢、体重、臓器の働き、他の薬との飲み合わせなどを総合的に判断して決められます。医師の指示どおりに正しく服用することが、安全で効果的な治療につながります。

おしらせ

オープンホスピタル 2025 を開催します　11 月 1 日（土）10 時～ 15 時

地域の皆さんに府立医大附属病院を身近に感じてもらい、児童・生徒・学生の皆さんが将来、医療従事者を目指すきっかけになるよう「オープンホスピタル」を毎年開催しています。

当日は、病院で働くさまざまな職種のスライドやパネル紹介のほか、内視鏡体験会、リハビリ補助具の展示など、施設の一部見学等も企画しています。病院のスタッフはどんな仕事をしているの？どんな機器を使っているの？これってなんだろう？という疑問にお答えします。普段は見ることのできない病院や医療の世界をのぞいてみませんか。

沐浴体験の様子

ポリスみやこちゃん（右から 2 番目）が駆けつけてくれました！

病院で働く人々 case 9

～医療従事者（看護部）のユニフォーム紹介～

看護師といえば白衣。ワンピースにナースキャップ、ナースサンダルを想像する方が多いでしょうか。時代の流れとともに、動きやすさが重視されるようになりました。パンツスタイルも登場し、男女とも着用できるスクラブタイプのものが人気となっています。

当院は、5 年に 1 回のペースでユニフォームの変更をしており、現在は 2022 年にスタッフの意見もとりいれ作成したものを着用中です。ポイントは、左肩の病院エンブレムです。

医療用 PHS が収納できるポケットや中で仕切られた両腰のポケットは、収納力があります。手洗いがしっかりできるよう半袖、足元は鋭利なものから保護するため、つま先のある靴を着用しています。

職種によって、看護師は「紺色」、看護補助者は「白色」、保育士は「水色」、看護学生アルバイトは「白色にピンクライン」と上衣の色を変えています。いつでもお声がけください。

「ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都（京都ハウス）」開設資金寄附募集 目標額達成のご報告

病気と向き合う子どもとそのご家族のための滞在施設「ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都（略称：京都ハウス）」の開設に必要な費用（建設費等）を調達するため、ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都開設募金委員会と公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンで、各４億円（計８億円）を目標に、企業・団体や個人の皆様からのご寄附を募集してまいりました。あたたかいご支援の輪が全国に広がった結果、寄附目標額を達成し、開設資金８億円を確保できました。「第二の我が家」として安心して過ごすことのできる京都ハウスの開設に向けてご支援を賜り、誠にありがとうございました。

［発行］ 京都府立医科大学　病院広報誌かもがわ編集会議
〒 602 - 8566　京都市上京区河原町通広小路上る梶井町 465
TEL：075 - 251 - 5804　E-mail：kouhou@koto.kpu-m.ac.jp
HP：https://www.h.kpu-m.ac.jp/

バックナンバーをご覧いただけます

2025 年 8 月発行